

# 存在と述語\*

——範疇論を中心として——

両角克夫

I doubt so I am. (Dubito ergo sum.)

I think so I am. (Cogito ergo sum.)

の如き文に於て、「I am.」の“am”の意味は、「Iがある」の“I”の存在(esse)の確認の表現であって、「Iは……である」の如き、「I」の本質(essentia)を規定するものではない。とすれば、「I am.」の“am”は、述語(praedicamentum)にはなり得ぬであろうか。

「……がある」場合の存在は、述語であるかどうかは古来論ぜられて来た。「紙は白い」と「紙は白くない」などは紙の存在の基本的様式(modi essendi)を述べた主語——述語の文であり、抽象によって意識の中に概念化される modus intelligendi は、更に記号的表出として modus loquendi となる。これが範疇(praedicamenta)であり、述語となるのである。

今、存在と範疇との関連を考えて見ると、Aristoteles の10ヶの範疇の中には存在は見られない。Aristoteles が範疇の最初にあげている ousia, substantia, は、或るものが、「何であるか」という問の答となるそのものゝ本来の在り方を意味する。Platon はこれを idea とし、感覺的個物はこれに与かることによってはじめて存在するとしたが、Aristoteles は例えば、この人、この馬、の如く不可分の個体を第一義的実体と考え、これは第二義的実体としての種(eidos)や類(genos)と異なり、如何なる主体(hypokeimeon, substratum)の述語ともり得ない atoma, individua, であるとする(cf. Aristoteles : Categoriae)。然し、実体は、その substantia の字義が示す如く生成変化する諸現象の下にあって自己同一にとゞまる恒常的存在であり、Descartes にあっては自己の依存のために他の何ものをも要しないもの、即ち神としての無限実体が考えられ、これに存在する有限実体として思惟と延長を属性とする精神と物体が夫々考えられている。かゝる無限実体は Aristoteles の10範疇を超える超越者なのであり、本来的に存在するもの(esse per essentiam)なのである。これは自己の存在のために他の何ものをも要しないと同時に、他のあらゆる存在者をさゝえる有でもある。このように考えて来る時、Aristoteles の 範疇に於ける実体(ousia)は、有限実体であって、それ自らの中に有、又は存在を含むものではない。このようにして Aristoteles に於ては、存在はその主語をも述語をも超えるものとなり、10範疇の中には入って来ない。

又、「バラは存在する」といっても、「バラは存在しない」といってもバラ自身の性質には関係はなく、「自分のポケットの中に存在する100円も、存在しない100円も、100円という性質に何の変化も与えないから、存在は述語ではない、とする論理学者は多い(cf. 沢田

\* 本論文は、信州大学教養部紀要第1号に掲載した「述語について」の続篇をなすものである。

允茂, 現代論理学入門 p.202, 岩波書店)。

だとすると, I doubt so I am. に於ける “am” は述語以外の一体何であろうか。

### ★

I doubt so I am. に於ける I am. は, I exist. と書きかえることが出来る。従ってこの “am” は, “exist” と等しく perfect intransitive verb なのであり, run, sleep, stand etc. の系列に入る語である。然し, I run. の場合 I am in the state of running. と変形出来るが, I am. の場合, I am in the state of being. と変形出来るだろうか。これは, am と being という同じ意味の語が重ってしまう。従って, この am を他の完全自動詞 run, sleep, などの系列に入れることは無理であろう。

やはり, I am. (I exist.) の場合の “am” は “I” が存在にあずかっているということ, esse participatum を表現しているものと云えよう。では存在にあずからない “I” とは何であるか。I am not. (I do not exist.) なる文は可能であろうか。

言語表現はすべて, way of speaking の中に含まれ, それは way of thinking に, それは way of being に関連する。従って文法と論理と存在論とは深くむすばれている。だからと云って, これらの三者が全く重なるわけではない。存在論や論理学の中で重要な役目を果している範疇論から観る時, たしかに Aristoteles に於ても, Kant に於ても, esse はその範疇の中から除外され, 主語に対する述語を形成するものではない。然し, “I am.” に於ける “am” は完全自動詞としての機能を有し, それは存在を意味し, 文法的には述語である。こゝにいう文法的とは, 形式的又は機能的の意である。従って, 存在的でも論理的でもない。文法は機能的なものであり, この点に於て数字的表現に接近するものである。「存在と論理」の学としての形而上学ではなくて, むしろ創造され, 構想された表現の世界に関するものなのである。

### ★

言語表現は, それが表現である限り, 主体の意識の諸相と対応する。意識は, 深層と表層に分けられると同時に, 表象又は記憶, 判断又は知性, 意志又は情意の三つの相に区分されるのは, Augustinus に於ても, 又心的現象の特徴を “対象としてのあるものへの関係”, 即ち志向的關係に依じて捉えた F. Brentano に於ても等しく見られるところである。

然し, 言語活動とは概念と音声との結合の作用過程であり, 概念とは知的判断によって形成され獲得されるものである。

言語はたしかに存在の反映であり, 思考と論理を伴うものである。だが, 存在は直接に言語に結びつくのではなく, 論理的思考によって作られた概念を媒介として結びつくのである。存在→概念→音声→言語の如き図式を抽くことも可能であろう。存在とは勿論意識との関連に於て捉えられたものであるが。

このように考えて来る時, 言語表現は存在に対しては表現の記号であり, 機能的なものにすぎず, 然って浮動的である。

“I am.” に於て, “I” と云う概念の背後にはすでに深層として存在が結びつき, ens としての “I” が考えられているのであろうが, それは implicit であり, “I am.” となって

はじめて ens としての “I” が explicit になったと云えよう。これはまさに表現の構造である。これが文法の論理でもある。

存在しても、存在しなくても、“I” なる概念の内包と外延に影響はない。“I” なる概念の “存在” なる概念に対する関係の判断が “I am.” であるとも云えよう。

“I who exist,” に対して “I who do not exist,” は、想像の世界では可能であり、従って言語表現の世界でも可能となる。それは表現の豊かさの拡大でもある。



存在命題は、主語——述語の文たり得るかの問題に対して、I doubt so I am. の文例を手がかりとしながら、存在、特に esse per essentiam が範疇を超越するものであっても、文法としては、主語を包む述語を構成するものであり、“am” も言語表現に於ては概念記号としての機能を果すものであることを考えてみた。



次に、“I am.” と “I am old.” の場合の二つの “am” の間の関係は何であろうか。“I am old.” の場合の “am” は copula であり、“I” と “old” 二つの概念を結ぶ場を形成している。“I am.” の場合の “am” は “I” をささえる場を形成しているとも云えよう。場とは “有” と云ってもよい。

Hegel に於ては論理学は範疇の学であり、又同時に形而上学でもあるが、そこでは第一の範疇は有 (Sein) として捉えられている。無規定の Sein は Nichts へと転じていく。Sein-Nichts-Sein の如き展開は、有と無に対する第三の範疇として成 (Werden) を得る。かかる考えからするならば、“I am.” は思考の出発を可能とする最初の自覚であり、判断でもある。“am” は “I” をささえる場の概念記号であるが、この場は、無限に展開していく時間的辯証法的構造を形成する可能性を包蔵するものである。従って、存在表現としての “am” はあらゆる存在者を包むと同時に、あらゆる判断を可能にする場としての述語であり、それは機能的で同時に辯証法的有の反映でもある。ここに、存在と論理と言語を包括し、更にこれらを超える或る者への通路が開けるとも云えよう。かかる道は、一般文法の展開にとって不可欠の基礎論を形成するものでもある。

## Summary

### Existence and Predicate

#### — A study of Category —

Katsuo MOROZUMI

From the point of view of logic it is often asserted that such a proposition of existence as "I am," or "I exist," is not a sentence consisting of Subject and Predicate, because existence or "esse" transcends categories.

In this essay the author tries to explain respective fields of ontology, logic, and language. Logic must be grounded upon ontology and language must be grounded upon logic. Language is a field of expression which is freely created by human beings that are of fundamentally historical existence.

But in order to promote the learning of universal grammar, it is necessary to integrate these three fields—ontology, logic and language. In Hegel's logic, being and thinking are combined into his metaphysics. And the field of expression or literature is treated of in his "phenomenology of the spirit", through which we can get a fruitful suggestion of the philosophy of language.